

研究主題「評価規準の共有を手だてとした、

論理的に表現する力を高める国語科の指導」

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課
都立一橋高等学校 主任教諭 藤井 ゆき

第1 研究のねらい

学校教育法第五十一条には、高等学校における教育の目標として「健全な批判力」の育成が挙げられている。また、高等学校学習指導要領（文部科学省平成21年3月）の「国語総合」には「様々な角度から検討して自分の考えをもち、根拠を明確にするなど論理の構成や展開を工夫して意見を述べること」が指導事項として挙げられている。しかし、平成27年度全国学力・学習状況調査の中学校の結果によれば、B問題において、文章や資料から必要な情報を取り出した上で、根拠を明確にして考えを書くことや、自分の考えを具体的にまとめることに課題があるとされている。所属校でも、文章や資料を読んだ上で自分の考えを表現することを不得手とする生徒が多い。これらのことから、文章や資料を読んで理解したことを基にして、自分の考えを論理的に表現する力を高める必要があると考えた。

ある問題について生徒の解答を教師が添削し、繰り返し指導すれば、生徒はその問題については論理的に表現することができるようになる。しかし、他の問題が出された時には対応できない。そこで本研究では、論理的に表現させるための手だてとして、論理的に表現できているかを生徒が評価し合い、確認できるような具体的な評価規準を開発し活用する。主張・根拠・理由を明確にし一貫性をもたせること、問いに正対することを評価規準として示し、それを基に相互評価と推敲を適切に繰り返させれば、生徒は問いに正対することや一貫性をもたせることなど、論理的な意見の述べ方への理解を深め、自分の考えを論理的に表現する力を向上させることができると考えた。

第2 研究仮説

論理的に表現するための評価規準の共有と適切な相互評価により、論理的な表現についての理解を深め、自分の表現に生かすことができれば、文章や資料を読んで理解したことを基に、自分の考えを論理的に表現する力を生徒たちは高めることができるだろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

先行研究・実践事例から、自分の考えを論理的に表現するには、生徒が主張・根拠・理由を理解し、それらを意識し明確にしながらい意見を述べるのが有効であることが分かった。また、評価規準を生徒に示し到達目標とさせ、達成度の確認（自己評価及び相互評価、教師からの評価）に活用すれば、到達すべき具体的な目標や留意すべき点を生徒が理解し、自分の達成度を確認できるようになり、授業の目標の達成度を上げるために有効であることが分かった。

2 調査研究

都立高等学校の国語科の教員49名と、第1学年から第4学年の生徒280名を対象とした質問紙調査を行い、文章や資料を読んで理解したことを基に、自分の考えを論理的に表現する学習に関する意識や実態を明らかにした。

教員に対する調査から、「文章と資料から情報を取り出し、筋道立てて自分の意見を述べる指

導」は、「文章を読み取る指導」に比べて、教員の自信の程度が低く、難しさを感じていることが明らかになった（「指導ができていないか（自信の程度）」について肯定的に回答した割合が「文章を読み取る指導」は 93%、「文章と資料から情報を取り出し、筋道立てて自分の意見を述べる指導」は 18%）。これらのことから、文章や資料を読んで理解したことを基に、自分の考えを論理的に表現させる指導を充実させる必要があることが分かった。

生徒に対する調査では「国語の授業の中で、自分の意見を述べるのが好きですか」という質問に対し、64%の生徒が否定的な回答をした。その理由について、否定的な回答をした者のうち 69%が「自分の意見をどのように言ったらいいかわからない」を選択した。このことから、自分の考えを論理的に表現させるためには、自分の意見をどのように述べれば良いのかを理解させる必要があることが分かった。

3 開発研究

論理的に表現するための述べ方を理解させ、互いに表現を高め合い、互いの伸びを確認させるため、(1)論理的に表現するための評価規準、(2)自分の考えを論理的に表現させるための問題及び(3)評価規準を具体化したチェックリストと、さらに(4)単元の指導計画及び(5)ワークシートを開発した。順に、その内容について説明する。

(1) 論理的に表現するための評価規準

論理的に表現できているかを評価し確認させるために、5つの評価の観点を設定した(表1)。

表1 <評価規準の5つの観点> 文章や資料を読んで理解したことを基に、自分の考えを論理的に表現する場合

①主 張	主張：立場を明確にし、自分の考えが明確に述べられているか。
②理 由	理由：主張と根拠のつながりがはっきりしているか。
③根 拠	根拠：文章や資料を理解した上で、根拠となる部分について指摘しているか。
④問いに正対	問いに正対：問われたことについて答えているか。
⑤一貫性	一貫性：主張、理由、根拠の間にねじれがなく、筋が通っているか。

(2) 自分の考えを論理的に表現させるための問題

文章や資料を読んで理解したことを基に、自分の考えを論理的に表現する活動を繰り返させるために問題1から問題4を作成した(表2参照)。これらの問題は、資料の種類や問い方に多様性をもたせ、徐々に難易度が上がるようにした。

表2： 問題2 食べ物の広告

問い あなたは、次の3つのポスターを見て、どのポスターが、伝えようとしているメッセージを一番効果的に伝えていると思いますか。自分の主張と、そう考える理由を説明しなさい。ただし、次の条件を満たすこと。(後略)

(3) 評価規準を具体化したチェックリスト

評価規準の5つの観点を具体的に理解し確認させるために、(2)の問題ごとに、評価規準を具体化したチェックリストを開発した(表3参照)。

表3 評価規準を具体化したチェックリスト(問題2用)

主 張	理 由	根 拠	問いに正対	一貫性
適切な形式で主張している。	適切な形式で理由を述べている。	文章や資料を理解した上で、適切な形式で根拠を示している。	問かれたことに答えている。	筋が通っている(主張、理由、根拠の間がねじれていない)。
主張だけを読んで、意味が分かる。	理由だけを読んで、意味が分かる。	文、字、写真・イラストやその配置等の効果について説明している。	条件をすべて満たしている。	納得できる理由を用いて、説得力がある。

各1点 計10点

(4) 単元の指導計画

問題を解く際に、評価規準を具体化したチェックリストを活用させるが、問題を自力解決する際にチェックリストを参照させただけでは、生徒の解答が論理的な表現になっていない可能性がある。そこで、自力解決の後に相互評価を行わせ、そこでの指摘を基に推敲と振り返りをさせる学習過程を積み上げ、繰り返す単元の指導計画を開発した（図1、表4）。表5は問題に取り組ませる際の1回のセッションの流れを示したものである。他者からの評価を自己の表現に生かし、解答をより良くする。この過程を問題の内容を変えて重層的に積み上げることにより、論理的に表現するにはどうすればよいかについての理解が深まると考える。授業の中では、「主張」「理由」「根拠」等を表す適切な形式や書き方の例についても示し理解を促した。

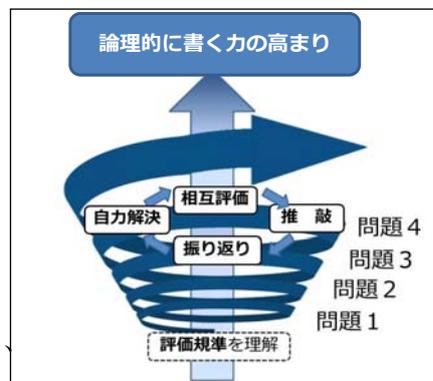


図1 重層的な指導のイメージ

表4 単元の指導計画

指導過程	学習活動
導入	単元の目標と内容を理解する。
理解・練習	評価規準を理解し、相互評価の練習を行う。
セッション1	問題1 小学生のスマートフォン使用
セッション2	問題2 広告1
セッション3	問題3 広告2
セッション4	問題4 音楽部のポスター
振り返り	学習を振り返る。

表5 セッションの流れ

	内容
①自力解決	問題に自力で解答する。
②相互評価	解答の相互評価を行う。
③推敲	相互評価を受け、解答を推敲する。
④振り返り	学習を振り返る。

*相互評価が適切にできているかの確認は適宜行う。

(5) ワークシート

適切に学習を行わせるために、解答・評価ワークシート、振り返りシートを開発した。また達成度と推移を確認させるため、チェックリストの得点の推移を示すシートを開発した。

4 検証

(1) 検証方法

① 検証授業

所属校の自由選択科目「国語表現」にて、第3・4学年15名を対象に検証授業を行った。

② プレテスト・ポストテスト

プレテスト：PISA「落書き」…落書きに関する二つの手紙を比較し自分の意見を書く問題

ポストテスト：PISA「インフルエンザ」…接種の案内文を評価する問題

③ 事前・事後の生徒の意識調査

自分の考えを論理的に表現する力に関する意識調査を、検証授業の事前・事後に行った。

(2) 手立ての有効性の検証

① 評価規準を共有し、適切に相互評価を行うことができたか

検証授業では、評価規準を基に生徒同士で相互評価を行わせた。生徒による相互評価と、教員による評価を比較したところ、検証授業での学習が進むにつれ適切でない評価（根拠を示していないのに「根拠を示している」と評価するなど）が減り、両者の評価が一致する割合が高まった（生徒による相互評価と教員による評価の一致度は、問題1から問題4まで、順に、85%、90%、93%、99%であった）。生徒による相互評価が教員による評価と一致する割合が徐々に高まったことから、適切に相互評価を行う力は徐々に高まったと考える。

② 論理的な表現についての理解が深まったか（事前・事後の生徒の意識調査より）

「どのように述べれば筋の通った意見になるかを理解すること」ができていくかという質問に対し、肯定的な回答が、検証授業前は10人中3人であったが検証授業後は10人中7人に増加した。また「自分の考えを表現する時、次のことを心がけていますか」という質問に対し、「主張」「理由」「根拠」「正対」「一貫性」の全てについて、検証授業後は肯定的な回答が増加した。

③ 評価規準の理解と相互評価、論理的な表現についての理解を自分の表現に生かしたか

相互評価を受けて推敲することにより、推敲前に比べチェックリストの得点が上昇した（図2）。

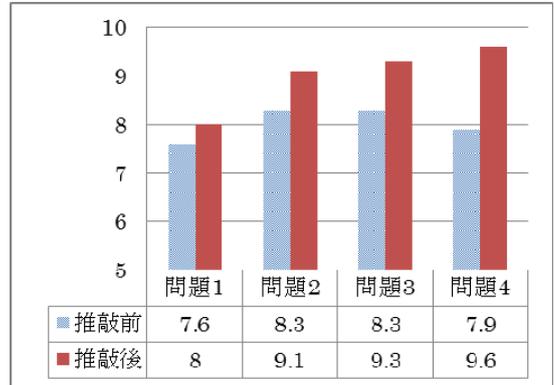


図2 推敲前・後のチェックリスト得点

(3) 自分の考えを論理的に表現する力が高まったか

① 検証授業でのチェックリストの得点の変化

授業を重ねるにつれ、推敲後のチェックリストの得点は、前の回よりも徐々に上昇した（図2）。

② プレ・ポストテストの比較

正答率が3割から7割に上昇し、誤答率が3分の1、無答率が4分の1に減少した（図3）。

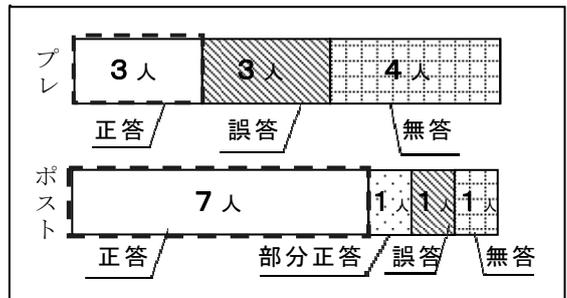


図3 プレテスト・ポストテストの結果

③ 事前・事後の生徒の意識調査

検証授業後は、論理的な表現を行うことに対する自信が高まった。また、「国語の授業中に自分の意見を述べるのが好きか」の問いに対する肯定的な回答が増加した。

第4 研究の成果

評価規準を生徒と共有し、「自力解決、相互評価、推敲、振り返り」の学習過程を重層的に繰り返すことは、文章や資料を読んで理解したことを基に、自分の意見を論理的に表現する力を高めるために有効であった。評価規準を共有し、相互評価と推敲、振り返りを適切に行わせたことにより、論理的に表現するにはどのように述べれば良いのかについて生徒が理解を深め、新たな問題を解く場合でも、自分の考えを論理的に表現できるようになったのだと考える。

検証授業後、今回の研究開発物を応用し、次の2種類を更に開発した。

- ・ 独立した単元を設定することが難しい場合も多いと考えられるため、高等学校国語科の教科書教材等の評論文・文学作品を読解した後に、自分の考えを論理的に表現させる問題及び評価規準を開発した。
- ・ 他教科でも論理的に表現する力を伸ばすため、高等学校の他教科において自分の考えを論理的に表現させるための問題及び評価規準を開発した。

第5 今後の課題

- ・ 検証授業において、推敲前のチェックリストの「根拠」の得点の平均値が他の項目に比べて低かったが、その原因と、これが他の集団についても当てはまるのかを明らかにする。
- ・ 研究成果を他の教員と共有し、研究開発物の改善及び普及を図る。